

永遠に若い女

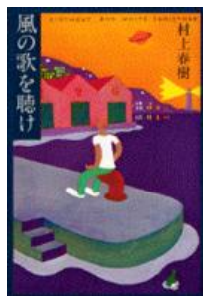
今から30年前になる。当時勤めていた高校で、国語科の先輩教諭と酒場で飲んでいたときのことである。かなり酔った後で、僕が開高健について話題にしたのだが、彼は即座に「あんな小説のどこがエエんや。スカスカの文体で書いて…」と切り捨ててしまったのである。

当時は、現在と違って小説家(文学者)が若者のヒーローであった時代である。ノサカだ、イツキだと、彼らが新作を発表したり何か発言するたびに話題になったものであるし、大学生が酒を飲むときにはオオエがどうたら、ヨシモトがどうたらといったハナシが必ず酒の肴さかなになったものである。カイコウもその一人であった。つまり、小説家(や詩人や評論家等々)が若者に影響を与え得た時代であったのだ。

僕は、彼の反応に驚きながらも「そうか～、彼が読んでいた小説は、漱石や鴎外は言うに及ばず、野間だったり安岡や大岡だったりしたんやろな～。確かに三文オペラなんて真空地帯と比べればスカスカやな～」と、妙に簡単に納得したのを覚えている。

そして、今、僕は、30年前の彼と同じ年齢になってしまった。僕は、30年前の彼のように、今の小説家の小説をウォッチしているわけでもないし、それがスカスカかどうかについて意見をもっているわけでもない。もちろん、切って捨てる自信はない。ただ、小説という文化があり、それに親しむことで楽しい時間が持てたことは事実である。だから、自分の読んできた小説や物語についてただ語るだけになってしまうのは許して欲しい。

誰が言ったのか忘れてしまったが、「歌は歌詞から古くなる」そうである。僕の書く文も、君たちの目の前にある昭和の物語も、書かれている「言葉」自体が古くなっているのは仕方がない。



■永遠に若い女

＝死んだ人間について語ることはひどくおぞかしいことだが、若くして死んだ女について語ることはもっとおぞかしい。死んでしまったことによって、彼女たちは永遠に若いからだ。それに反して生き残った僕たちは一年ごと、一月ごと、一日ごとに歳を取っていく。＝

村上春樹『風の歌を聴け』

村上春樹の小説はそれほど読んだわけではない。風の歌を聴きながら、スローボートに乗って中国に行き、ハードボイルドワンダーランドで羊をめぐる冒険を楽しんだ後、ノルウェイの森に辿り着いただけである。その後、いつしか僕も歳を取っていき、村上春樹の小説が僕の本箱で増えることはストップしてしまっている。

君たちは、海南高校で「高校時代」という若い女と付き合いしてきた(付き合いしている)はずである。そして、高校卒業を迎えると、その若い女は死んでいく。もう彼女とデートすることも、食事をすることも、会話を楽しむこともできなくなってしまう。どんな付き合い方をしたのか、どんな思い出が持てたのかは各人各様だろう。しかし、一つだけ言えるのは、その彼女は君たちにとって永遠に若いままであるということである。いつまでも若いままに生き続ける。

これからも、大学なり会社なりで何人かの若い女と出会うだろう。たくさんの彼女(彼氏)との出会いやデートを楽しみ、別れを経験し、やがて、君たちは、人生を生きていくことにより歳をとっていく。

しかし、この3年間、海南高校で君たちが付き合い合った若い女は永遠に若いまま生き残るはずだし、そうあって欲しいと思う。

■さらば、我らが日々

＝人間にとって、過去はかけがいのないものです。それを否定することは、その中から生まれ育った現在の自分をほとんどすべて否定してしまうことと思えます。けれども、人間には、それでもなお、過去を否定しなければならない時がある。そうしなければ、未来を失ってしまうことがあるとは、お考えになりませんか？＝



柴田翔『されど われらが日々』

人は誰でも、新しい自分に向き合おうとするとき、過去を否定しなければならない時がある。まだ十数年しか生きていない君たちには分かることが難しいかもしれないが、そうしなければ未来を失ってしまうことがあるからである。

と言うより、大人になっていくということは、過去を否定していくプロセスなのかもしれない。中学校を卒業した段階で、もう中学時代は「過去」であり、高校を卒業すれば高校時代は「過去」になる。高校卒業後には、4月から新しい地で新しい生活が始まる人もいる。また、この地で生活するにしても、初めて出会うヒト、初めて経験するコトが立ち現れるだろう。それは、君たちが「未来」をつかんでいく旅でもある。その中で「過去」とどう向き合うかが問われる場面もある。

そのとき、君たちは、僕たち年寄りがただ単に過去を懐かしむように高校時代を懐かしむのではなく、「未来」を失わないで生きていってほしいと思っている。



昭和の物語 物語としての昭和

片山先生(数学科)からのアンソロジー

■厳肅な綱渡りを演じる君たちへ

＝一昨年の冬、ぼくはエジプトの土の家に泥まみれになって眠り、ナセルの軍隊に加わって戦いたいという、狂気じみて暗く、激しい情念にとらえられていたものだった。＝

大江健三郎『厳肅な綱渡り』

高校生は、いずれ、早かれ遅かれ社会に出て「世の中」を生きていく。仕事をし、結婚をし、家庭をもち……という人生は、言ってみれば厳肅な綱渡りをするようなものかもしれない。時としてタイトロープの上をおっかなびっくり歩くようなこともあるだろうし、思わず眼を瞑りたくなることもあるだろう。

君たちが渡っていくこの社会は、決して甘い夢だけを見させてくれるわけではない。この文に続いて、次のようにも書かれている。

＝ぼくら日本の若い人間たちが、あいまいで執拗な壁にとじこめられてしまっているというイメージ、ぼくらの間には真に人間的な連帯はなく、ざらざらした毛皮をおしつけあってほえる犬たちのように、ただ体をからませあっているだけだというイメージ。＝

都会の街中を漂流し、ネットカフェを根城ねじろにしている若者の姿が新聞やテレビで報じられるたびに、そして悲惨な事件が起こるたびに、僕はこの一節を思い出す。優れた作家の想像力はやはりすごいな～という感嘆とともに、君たちには「真に人間的な連帯」を持った人生を歩んで欲しいと願っている。「あいまいで執拗な壁に閉じこめ」られることなく、「ただ体を絡ませ合っている」だけの状態ではなく……。

(続く)

■編集部より ■君たちにとって、はるか彼方の昭和のそのころの流行歌—

「そんな時代もあったねと いつか話せる日が来るわ あんな時代もあったねと きつと笑って話せるわ」(中島みゆき『時代』) いつの日か、君たちもそれぞれの思いを込めて歌うことだろう。



あいまいで執拗な壁 / 真に人間的な連帯